

ゆるふーVI

まなキキ・オンライン講読会

『主体の解釈学』第一講

一九八二年一月六日①「主体性と真理」他

2025年5月20日

M せんせい

■ 「自己への配慮」と「汝自身を知れ」について

今年のフーコー：主体と真理の関係を「自己への配慮(エピメレイア・ヘアウトゥー)」という観念を通じて考えていく

- これまで、「汝自身を知れ(グノーティ・セアウトン)」こそが主体の問題を考える際の観念として捉えられてきた。
- 「汝自身を知れ」という規則は、ある種「自己への配慮」に従属するような形で述べられる。
 - 自分に配慮せよ、自分のことを忘れるな、自分の世話をせよ、という一般的な規則のさまざまな形のひとつ、一種の具体的応用として現れたものとして「汝自身を知れ」がある。
- ソクラテスもまた、「汝自身を知れ」で知られがちだが、実際は「自己への配慮」を指摘してきた人であった
 - 若者を呼び止めては自己に専心せよと促す
- ソクラテスという人物から、禁欲生活を自己への配慮によって開始するキリスト教的禁欲主義に至るまで、<自己への配慮>の考え方は拡張され、その意味も増え、また変化してきた：本講義の内容

■ <自己への配慮>概念の特徴（P14, L10-）

1.	<自己への配慮>とは、ひとつの態度であり、自己や他人、世界に対する態度である。
2.	自己への配慮は、自分が考えていること、思考の中で起きていることに注意を向ける一定のやり方を含意している。
3.	いくつかの行動、人が自己に対して行う行動、自己の世話をし、自己を変え、自己を浄化し、変形し、変容させる行動を指す。：省察の技術、過去を記憶するための技術、良心の吟味の技術、精神に対して現れるさまざまな表象の検証の技術につながる

<自己への配慮>という概念を通じて、主体性の歴史、主体性の諸実践の歴史をたどっていく。

■ 「自己への配慮」が西欧の思考、哲学において重視されてこなかったのはなぜか（P15, L20-）

理由1. 今日的感覚では、なんだか受け入れがたい

- ⇒ 自己への配慮という原則の中には、私たちにとっていくぶん困惑を引き起こすようなものがある。
- 自己を称揚し、自己を礼拝せよ、自己に引きこもり、自己に奉仕せよ、といった呼びかけに対して、肯定的な価値を付与することができない。
 - しかし、古代の思想においては、「自己に専心する」ことはいつも肯定的な意味を持っており、決して否定的な意味を持つことはなかった

- まさに「自己に専心せよ」という呼びかけを出発点として、西洋にかつて存在したなかでおそらくもっとも峻厳かつ厳格、抑制的な道徳が構成された。
- ⇒ (キリスト教と近代世界は、長い歴史の過程で、)非・自己中心主義の一般的な道徳の文脈のなかに置き換え、移転。(自己への配慮という主題はないがしろに)

理由2. この逆説の総体:(もともとの意味合いとは異なるものに置き換わってしまったため?)歴史家の関心からも消えてしまった

理由3. 真理と真理の歴史に由来するもの:「デカルト的契機」

- ・ <汝自身を知れ>の格上げに貢献
- ・ 哲学的手続きの起源、出発点としての明証性:自己認識を、認識の形式として(そのうえ、まさに私の主体としての存在の不可疑性という形で)参照している。(デカルト:「我思う、ゆえに我あり(Cogito, ergo sum)」)
- ⇒ 「汝自身を知れ」は、真理に到達する根本的手段に／自己への配慮の原則は格下げ、近代の哲学的思考の領野から排除されていく…

■ 哲学と霊性／主体と真理の関係の近代のはじまり (P19, L4-)

哲学	主体が真理に至ることができるようにするものを問う思考の形式。主体の真理への到達の条件と限界を定めようとする思考の形式
霊性	・ 主体が真理に到達するために必要な変形を自身に加えるような探究、実践、経験 ・ 真理は主体の存在そのものを問題にするような代価を払ってはじめて与えられる ＝主体の変形ないし立ち返りなしに真理はありえない ※ 立ち返り:主体をその身分、現在おかれている条件から引き離す運動というかたちでなされる ➤ 真理を受け入れることができるようになるために主体はどのように変形されるべきか(長い修練の辛苦のなかでなされる、自己による自己の段階的な変形)、そのあり方が考えられてきた ・ 真理への到達は、主体に対する真理の「反作用」を起こす;真理とは主体に天恵を与え、至福を与え、魂の平穏を与えるもの

- 古典古代とよばれる時期
 - ・ 「いかにして真理に到達するか」という哲学的問題と霊性の実践は一度も切り離されてこなかった。
 - <自己への配慮>はまさに、霊性の諸条件の総体、真理に到達するために必要な条件であった。
- 近代:「デカルト的契機」が位置づけられるところ・真理の歴史の近代
 - ・ 真実に到達することを可能にするものは認識であり、ただ認識だけであるということになった。
 - ・ 哲学者／真理を求める者が、他には何も要求されることなく、自分の主体としての存在が修正されたり変質せしめられたりする必要もなく、彼自身で、ただ自分の認識行為によって真理を認め、それに到達できるようになった
 - ①認識に内在的な諸条件(形式的条件、客観的条件、方法の形式的規則…)
 - ②個人に外在的な諸条件(狂っていないこと、教養ないし陶冶にかかわる条件:一定の学問的な含意)

という二つの留保のもとで、「あるがままの主体は、いずれにせよ、真理を受け入れることができる」ようになった

- 具体的な生存における個人に関わるものであり、主体そのものの構造には関わりがない
- もはや、真理の「反作用」によって変容するあの瞬間、主体の存在を推移させ、横断し、変容させるあの瞬間、こうしたすべてはもはや存在し得なくなった
- 認識はひたすらに、進歩の際限のない次元へと開かれていく
- それがもたらす利益はただ歴史をつうじて、制度化された知識の蓄積によってのみはっきりとしたかたちで与えられる(利益といえるものは、心理的あるいは社会的なもの)
- 真理は、これ以降(「デカルト的契機」以降)、そのままでは主体を救うことができなくなる

霊性の時代:	主体はそのままでは真理を受け入れることができないが、真理はそのままでは主体を変容させ救うことができる 《自己への配慮》:ある様式に従って①どのような態度をとり、②視線をむけて注意を払い、③行動するのか、といった形式—技法:テクニク
主体と真理の関係の近代:	主体はそのままでは真理を受け入れることができるが、真理はそのままでは主体を救うことができない 《汝自身を知れ》:自分自身について知ったり、自分自身について考えたりするような「認識」の問題として捉える

まとめ

今年度の授業でキーワードになるだろう用語として「自己への配慮」を挙げ、その概念がどのように位置づけられてきたのかを説明。特に、「汝自身を知れ」の概念との関係性について触れる。「自己への配慮」を切り口に主体性の諸実践、主体性の歴史の変遷をみていくことができるとし、大きな転換点として、主体と真理の関係の近代化の経緯を確認した。真理をうけいれるために、主体が修練を重ねて自己を変容させるうえで「自己への配慮」はその技法・実践の形式として重要な概念となっていたが、主体が変化することなく認識行為によって真理に到達するフェーズに至り(「デカルト的契機」)、そこでは「汝自身を知れ」≡コギトの発想が重視されるようになったということ。それによって、もはや真理は主体を救うことができない、とされる。

感想

なんとなく「自己への配慮」の自己の変容は宗教的なイメージ…儀式めいた印象を受ける。神様の啓示を受けるためにチャンネルをあわしていった、ビビビとくる的な。一方で客観的な認識を積み重ねていく「汝自身を知れ」ことで、真理に迫っていくやり方は、馴染みがあるかんじ。ただ、「主体を救う／救わない」とはどういうことなのか。しかし、「そのままの主体」で客観的な認識を積み重ねて真理に至ることができるのか?などとも考える。真理を求める過程で、(フィールドに入っているなどすると特に)自らの変容から免れないような印象も持つ。Going native は避けねばならないことなのかもしれないが、そのギリギリに迫ろうという姿勢はあり得る気がするし、そうやって知ったり、理解するということはある気がする…。